NAGI

家主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＡＧＩ

【Ｎコード】
Ｎ１５３８Ｊ

【作者名】
家主

【あらすじ】
ある日、平凡な生活を送っていた少年は手違いで死神に殺されてしまった。その直後、少年は異世界の神様の声を聞く。基本なんでもあり、いきあたりばったり小説です。

1　鬼畜＋神様＝不運な俺（前書き）

手違いで短編で出してしまいましたが改めて連載させていただきます。
この物語も手違いから始まります。
さて、ゲームでもしますかな＾ｐ＾

1　鬼畜＋神様＝不運な俺

それは一瞬の出来事だった。

日々の日課、ニコ生＜ニコニコ動画生放送＞を観覧していた時だった。

世の中というものは鬼畜なもので一番見たい番組のときに限って混雑していて見ることができない。

一般会員の俺はただ悲鳴を上げることしかできずにいた。

仕方なく、世界のようつべこそＹｏｕＴｕｂｅに画面を切り替えようとしたその時。

いきなり画面が真っ赤に染まった。俺はＰＣＢ＜パソコンボーイ＞だ。

そんなことでは動揺しない。何か仕掛けがあるんだろうと落ち着いて考える。

まさか赤い部屋でもあるまいし後ろを振り向いたら死神がいたり・・・。

ザシュッ。

ありえない。こんな死亡フラグ現実にあっていいはずがない。

こんなこと世界のＷｉｋｉｐｅｄｉａだって予測不可能なはずだ。
だけど案外都合の良い話かもしれない。
中２の俺がやるものといえばテスト、勉強、部活、塾。ＰＣやゲームを一時間以上すれば母親の怒号が家中に響き渡る。こんな生活でいいのか？限りある短い人生を棒に振っていいのか？
だけど世の中なんてかなーりくだらないとも思う。
やりたいことなんていくらでもあるけど・・・ここで死ねるなら本望かもしれない。
俺に希望なんてないんだ。まぁ、きっとこれ夢オチだろうがね。起きればきっと全部「嫌な夢だった」の一言で終わる。世間一般で言うお約束というやつだ。

『少年よ』

天から声が降ってきた。

「はいなんですか？」

『おお、なんと対応力のある少年かッ。わしの声を聞いても動揺せず冷静に返答するとは・・・なかなか肝の据わった男じゃ』

どうやら死亡フラグは回避できたようだ。
だけどこの爺さんの声、なんなんだろうか。
流石夢、なんでもありだ。

『よいか少年よ。現実逃避せずに聞け』

いや、爺さん。現実とかどうこう言う前にこれ夢です。

『お前さんに試練をやる。お前さんは今死んだ。生き返るためにもう一つの世界を救って来い。わしがその世界の神様なわけだが・・・。まぁちょいとした手違いでお前さんの家のＰＣにウイルスとして入り込んじゃったみたいでのう。自動的に死神もこっちの世界に来てしまったみたいでのう。まぁ悪い話じゃなかろう。どうじゃ？引き受けてくれんかのう。引き受けてくれるならばお前さんの命を現世に留めておいてやろう』

いや、そんなことはありえない。
だってこれは夢なんだから。

こんな夢みたいなことが現実で起るんなら俺は神様相手にだってケンカを申し込んでやる。
でも夢ならこの話に乗ってやってもいい。

「ふッ・・・もう一つの世界ねぇ。その世界に行って俺に得はあるのか神様？」

『ふむ。あるといえばあるし、ないといえばないのう』

「なんだよはっきりしないなぁ」

『まぁ、行ってみればわかるわい。それじゃ転送開始するぞい』

「えぇえ！？まだやるって言ってな・・・」

落ち着け、俺。考えてみればすぐわかることだ。

ここまでくれば大抵目が覚める。ここからが楽しいところなのになぁ、と心の中で呟きながら朝日を浴びる。
そうさ・・・ここからが楽しいところなのにって目が覚めるんだ。
目をあけるとそこには見慣れた天井が・・・ない？

あれ？ここ・・・どこだ？

「うっそだろオイ・・・」

まるでゲームや漫画の類の世界に入り込んだような気分だ。
まさか自分がこんな嘘みたいな、夢みたいなことに巻き込まれるなんて・・・・。

俺の名前は原和（はらなぎ）。

至って普通の中学2年生だ。
容姿は良い・・・と周りからは言われるが個人的には容姿は別にどうでもよい。
要は中身だ。人間中身が肝心だ。人間としての器。器量がなによりも大切だ。

何事にも対応できるほどの大きな器・・・。
俺は今、人生最大の危機に陥っている。
鬼畜なネ申様。どうか俺にこの現状を把握できる大きな器をください。

こうして俺の平和に満ちた生活に終止符はうたれた。

丸腰＋お約束＝魔物出現

俺の名前は原和（はらなぎ）。
神とやらの手違い・・・否、アホな所業により今ここにいる。

「どこなんだここは・・・」

辺りを見回せば一面の砂丘、砂丘、砂丘・・・。
一瞬目がくらむ程の眩しい光に包まれたかと思ったらいきなりこんな殺風景な場所に飛ばされるなんて・・・。妙に風が塩気を含んでいる。どうやら近くに海があるようだ。

「まぁ・・・歩いていけば何かイベントが起こるんだろうな。この場合」

明らかにＲＰＧ的な展開だ。これから何が起きてもおかしくはない。だが頼むからまだ魔物（モンスター）の類は出てきてほしくない。説明するまでもないが今、俺は丸腰だ。突然背後から丸腰のＬＶ１の勇者に襲いかかってくる魔物（モンスター）・・・。想像するだけで背筋がゾクッとする。

グルルルルッ。

妙な鳴き声と不気味な気配に身体を強張らせる。
いやいやいやッ！お約束すぎるこの展開はなんぞ！？
どうやら早くも望まぬイベントが発生してしまったようだ。

恐る恐る、後ろを振り向くとそこには赤褐色の毛をした碧眼の狼がいた。おいおい迫力があるにしても程があるぞ犬ッコロ。牙むき出しですやん。怖いやん。

だが何もしない訳にもいかない。完璧に我流だが構えてみる。どこぞの漫画で見たことのあるような単調すぎる構え。どっからでもこーいッ！なんて言ってみたいものだ。正面から来てください。

だが、狼は近寄ってこない。何故だ？
すると突如キュイーン、と独特な機械音が背後からした。
俺は反射的に地面に手を付けた。すると頭スレスレの位置を光線が一直線に走った。
なんでもあり・・・そうだね、なんでもありだねこりゃ。
まぁ後ろを見なくてもわかるが一応振り向いてみる。
そこにはどこかでみたことがあるような機械ロボットが3体。異常な程でかい。両手に斧を持っている。光線で攻撃できるのなら斧は不要では？

頭の隅では冷静に考えているものの、素直に現状を受け止められない。

・・・怖ッ。ボソりと呟く。
うおおおおおッ！怖ッ！あんたら初っ端から気合い入れすぎだっつのッ！物語の初期っつったらもっと可愛げのあるスライムみたいなヤツでいいだろ！！こんな子供相手に頑張りすぎ！こっち丸腰！
お前ら武器所持！何この格差！死亡フラグはもうやめてちょーだい！

ぶわーッ、と一瞬で本音が頭の中を駆け巡った。
丸腰で勝てる気など毛頭ないが、負ける気もない。

日本男児なめるなよッ。男は拳で語り合う！それ常識ッ！いざ、尋常に勝・・・

「見つけました見つけましたーっ！」

今度は背後ではなく、頭上から甲高い声がした。
視線を上にあげるとそこには一人の少女がいた。妙な機械に乗って宙に浮いている。金髪の長髪を風になびかせ、耳には小さなイヤリングを2つ。服はどこか民族のモノだろうか。独特な模様が印象的だ。可愛らしい屈託のない笑顔をこちらに向けてくる。ＲＰＧ的に考えれば、魔法系の少女だ。

「御主人様の命令でここに来ましたーッ！私、案内人のエレナですなッ！あなた救世主様ですよな？」

あの、どうでもいいんでこの魔物（モンスター）どうにかしてください。悠長に自己紹介とかしてる場合じゃないんですよお譲さん！現状把握してくれ！俺も現状把握するだけでいっぱいいっぱいだから！

「ちょ、この魔物（モンスター）なんなんだ！？」

身構えたまま和は頭上の少女に向かって叫ぶ。
少女は人差し指を頬に添えてまたしても屈託のない笑顔を向けてきた。

「ほいな、この子たちは神様のペットです♪」

ぶっ潰すぞあの神様（ジジイ）ッ！！！！！
こんな危険すぎるペットがあるかッ！あの神様（ジジイ）今度あったら絶対に文句言ってやるッ。アホなことをするやつは老若男女関係ナシ！暴

力までは及ばずとも必ずしも天罰が・・・。

「とにかくこちらに来てくださいなッ！」

俺の思考を遮るほどの明るい口調に調子が狂う。
少女が空飛ぶ機械から降りてきた。そして軽やかに地面に着地した。
まるで小動物の様な上目遣いでこちらに詰め寄ってくる。
うッ・・・。なんか妙に積極的だ。女の子はどう接していいかわからないから苦手だ。たとえそれが違う世界の人間だとしても・・・。
わかる？この気持ち。健全じゃないとか言うなぁぁ！！！（以下略）

「さぁさ！こっちですな！」

いつの間にか周りにいた魔物（モンスター）はずらかっていた。しっかり空気は読める奴らみたいだな。
それにしてもどれだけここの砂漠は広いんだ。地平線の先まで砂漠が続いている。
少女は無言で俺の前をスタスタと歩っていく。手をひかれながらただ無言。こんな状況（シチュエーション）、健全な男子諸君ならば確実にあーんなことやこーんなことをするのだろうが・・・。
どうにかして話を盛り上げねば・・・。とにかく情報収集からだなッ！うん！

「ところで・・・」

「ほいな？」

「ここってどこなんだ？俺、地球ってとこから来たんだけど。この世界って全部砂漠なの？？」

改めて辺りを見る。太陽はもう沈みかけていた。みたところ環境的には地球とまったく同じだ。構造的にも変わったところはない。強いて言えば現実的にはあり得ない魔物(モンスター)がいるっていうね。それにしてもＲＰＧの影響をよく受けてるなこの作者。読者ウケすると思ったら大間違いだＺＥ☆チクショー。

「ここは神様の庭ですのな！だからここは魂界(アクアヴェルト)の裏面なんですな！」

「んえ？アクア・・・なんだって？」

「魂界(アクアヴェルト)ですのな！魂の国ですな！あなた死んだんじゃないんです？」

「た・・・魂？」

はい？また意味不明なことをズラズラとこのお嬢さんは・・・。

「ここですのな！」

今にも飛び上がりそうな勢いで少女は立ち止まった。
だが前方には何もない。あるのは見飽きた砂漠だ。

「ここって何もないじゃないか」←棒読み

「ほいですな！ありますのな！行くですのな！」

行くって・・・そう声に出す前に背中をドンッと力強く押された。

うぎゃあああああ！！

目の前にあった筈の砂漠は視界から消え失せ、かわりに今度は視界

が真っ暗になった。身体は落ちている感覚があるのにどこか無重力のように体がフワフワとしている。落ちる！落ちる！ちょ！怖いって！死亡フラグやめれ！！ＲＰＧ感こんなとこで味わいたくないーッ！

スッと落ちる感覚が消えた。フワフワとまるで水に浮いてるような感覚に包まれる。

「大丈夫ですのな？すごい絶叫が・・・」

高所恐怖症の人にとっては今の地獄だったろうな。うん。

「ああ、大丈夫だよ。ところで聞きたいことがあるんだけどさ。えっと・・・エレナだっけっか？」

「ほいな！なんでもお答えしますのな！」

依然として視界は真っ暗だが正面付近からあの少女の声が聞こえてくる。高く、よく通る声で聞き取りやすい。

「それじゃ、俺この世界を救えって言われてここに（無理やり）連れてこられたんだけど（まぁ、本当は生き返るために来たんだけどね）具体的に何をすればいいんだ？まさかＲＰＧみたいに戦争を止めろーとか言うんじゃ・・・」

「ほいな！！そうですの！なんでわかったんですな！？」

あちゃー。

何よこの鬼畜な設定。もうどうしていいかわからない俺はとにかく持ち前の営業スマイルで振舞ってみる。営業スマイルさえ忘れなければ難なくやっていけるはず。

「ついたですのな！」

グンッと上から圧力がかかる。
そのまま叩きつけられるように着地した。足が痺れて痛い。

「いてて。ん？なんだここ」

そこにはたくさんの人がいた。
どうやら町・・・のようだ。

何がなんだかわからないが一つここで俺は誓う。
俺は自分に素直に生きる。絶対ＲＰＧ的な展開になるだろうが自分だけは見失わず健気に頑張ろう。うん。頑張ろう・・・。

隣で無邪気に笑っていた少女は俺を置いて町の奥へと駆けて行った。
案内人とか言ってなかったけ？あれれ？
またしても放置プレイをくらう俺。

でも負けない！負けないよ俺！！頑張るよ俺！！！

丸腰＋お約束＝魔物出現（後書き）

受験あるのに何してるのやら自分＾ｐ＾負けない！負けないよ俺！
頑張るよ俺！↑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1538j/

ＮＡＧＩ

2010年10月28日06時09分発行